

山ゴボウ栽培指針

防除基準を遵守し栽培履歴を記帳しましょう。

1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">深耕作業</div> <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px; margin-left: 10px;">土壌消毒</div>																		<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">収穫</div>																	
播種期 (6月中旬では、抽台が多発、注意)																																			

1. 栽培の特徴と生理生態

来歴

ヤマゴボウは、キク科のアザミに属する植物で、山野に自生していたモリアザミを栽培したものである。山ゴボウは日本原産であり、地方により様々な呼び名がある。岐阜県恵那地方や愛知県の奥三河地方では菊ゴボウ、島根県大田地方では三瓶ゴボウ、金沢車付近では白山ゴボウ等と呼ばれている。

用途・利用

ヤマゴボウは、大部分が炭水化物からなっている。加工処理の過程で問題になる物質としては、アクと、塩漬けにしたときに表皮に付着する乳白色の粘りのある物質とがあげられる。アクは加工のときに原料を黒色にするが、水溶性であるから水にさらすか、または酸で処理してアク抜きすることによって取り除くことができるので、両方が併用されている。

形態的特性

地上部はノアザミによく似ており、主枝をそのまま伸ばせば草丈は3m以上になる。着生する葉の形状もさまざま、切込みの深いノアザミにちかいものから、丸葉系のもの、さらにその中間のものがある。しかし葉形については幼植物時代だけの差で、抽台株は大差なく、その葉の特徴は切込みが深い。

作型の分化

とう立ちをさせないように、優良品を収穫するためには、種まきの時期をあやまらないことが大切である。播種期が早すぎるととうが立ち、夏の高温乾燥期では発芽が悪くなったり、生育が非常にムラになり収量が落ちる。

管内では、標高700m地帯におけるとう立ちのでない安全な播種期は6月下旬である。

最低気温が15℃以上になった時期である。

経営的特色

最も労力を必要とする収穫作業の時期が秋から初冬なので、ほかの農作業がすべて終了してからとりかかることができるので経営上から都合のよい作物である。

しかし連作することによって土壌病害の黒あざ病の発生が多くなりやすくなるので輪作体系を組む。(5年程度作付けを避けることが望ましい)

品種「SB系」

昭和43年に現在の長野県の奨励品種となって広く普及している品種である。

品種名の由来は、抽台がおそいこと、slow boltingの略である。

主要な特性としては、とう立ちの少ないことであり、葉型は完全な丸葉である。

この品種はかなり揃いがよく、とう立ちが少ないことから10～15日早まきが可能である。

1. 栽培技術の実際

(1) 作期の設定 6月下旬～7月上旬

ヤマゴボウの播種期は梅雨期にあたるが、この梅雨の時期をのがさないようにする。集中的な降雨で種子が流出しないかぎり、発芽に好適な条件がそろっているからである。梅雨明け後の夏の高温乾燥期には発芽が終わっている状態がのぞましい。

(2) 土壌消毒の実施

山ゴボウは、ネコブセンチュウの被害を受け岐根を発生し圃場全体が出荷不可能になることが多いので、バイデードL(40～50kg/10a)を圃場全面に均一に散布し山ゴボウの根の周囲に均等に分布するよう土壌とよく混和する。

(03.2月現在土壌消毒剤として、登録の有る剤は、バイデードLのみ)

バイデードL粒剤は、ガス化しない為、ガス抜き期間を設ける必要は無い。

(3) 耕起とうね立て法

うね立ての方法にはつぎの二つの方法がある。

トレンチャーの溝幅に蒔く方法 条間 20cm

広幅まき法 トラクターでアスパラ掘り取り機を利用して収穫することを考慮して決める。

まき幅 90cm 通路 30cm幅

続いて、播種機で播種する。

この時、播種後に播種機の轍が出来て、降雨後水がたまり発芽したものが立ち枯れを起こす場合があるので、麻袋などを引きずって轍を消すと良い。

条間 15cm 6～7条蒔き 間引きは行わない。

覆土の厚さ 5～6m/m

ヤマゴボウ栽培で最も重要な技術が、発芽を良好にさせることである。

対策の一つに、畑を耕起することによって破壊された土の毛管現象をもとにもどし、まかれた種子付近の土壌水分を保つための、土の鎮圧作業がある。

方法としてドラムカンに水を3分の1でいど入れ、これをまき床の上にごろがす。

播種量 10a当たり4L

(4) 施肥基準

肥料名	施肥量	施肥法		成分			備考
		基肥	追肥	N	P	K	
堆肥	1500	1500					
BBM42号	100	100		10	21	12	
B M 苦土重焼隣	20	20			7		
炭酸苦土石灰	200	200					
計				10	28	12	

生育不良の場合は、本葉4枚までに野菜追肥30号を1袋、降雨前を見計らって施用する。
堆肥は完熟のものを使用しないと、岐根の発生原因となるので、前年秋のうちに施用しておく望ましい。

化成肥料は、ガス抜きを兼ねて散布。播種予定の3週間以上前に済ませます。

(5) 播種後の管理

除草剤散布

山ゴボウは、発芽から50日くらいの間の初期生育量が小さく、初期の雑草害が大きいのでこの時期の雑草対策を徹底する。

表1 病害虫防除

病害虫名	病徴と発生要因
黒あざ病 <i>Fusarium solani</i>	1 主根の表面に病斑を作り、初期は赤褐色で、やがて黒褐色となりくぼむ。 2 連作が進むにつれ、急激に多発してくる。
根斑病	1 葉や葉柄に茶褐色の病斑を作る。 2 9月中旬以降、降雨が多いと発病する。
ネコブセンチュウ ネダサレセンチュウ	1 ネコブセンチュウは主根や根茎にこぶを作る。 2 ネダサレセンチュウは主根の表面にしみや小亀裂を生じる。 3 土壌中のセンチュウ密度が高いと被害が大きくなり、連作によって増える。また、ニンジンなど寄生しやすい作物の跡地でも発生が多い。
ロトウムシ ネキリムシ類	1 春、秋に被害が大きく、盛夏には少ない。

(6) 収穫

10月に入れば収穫可能になるが、特有の香りとカリカリした肉質を得るには、2～3回霜に遭遇してからが良い。

収量は、a当たり150kg～200kgである。

規格 2L～S 4kgDB出荷 中京・京阪神方面出荷

Sは1kg入りビニール袋

岐根は、地場販売で殆ど消費される為、廃棄するものはほとんど無い。